

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「人類社会の進化史的基盤研究（3）-他者-」2012年度第1回研究会

日時：2012年5月19日（土曜日）午後1時～6時30分

場所：AA研マルチメディアセミナー室（306号室）

報告者名：

1. 河合香吏（AA研所員）「趣旨説明」
2. 各学問分野における「他者」
 - 2-1 早木仁成（AA研共同研究員、神戸学院大学）
 - 2-2 曾我亨（AA研共同研究員、弘前大学）
 - 2-3 大村敬一（AA研共同研究員、大阪大学）

内容：

1. 趣旨説明（河合香吏）

（0）「人類社会の進化史的基盤研究」共同研究課題（旧共同研究プロジェクト）

本研究課題は「人類社会の進化史的基盤研究」として長期的展望にたって進められてきたプロジェクトの第3期にあたるものであり、「他者」をテーマとする。これに先んじる第1期と第2期は、それぞれ「集団」および「制度」をテーマとして、前者は2005～2008年度（4年間）、後者は2009～2011年度（3年間）におこなわれてきた。「他者」をテーマとする新規研究課題は、先行する第一期（集団研究会）および第2期（制度研究会）の到達点から出発ないし再出発するものである。そこで、集団研究会および制度研究会で議論されてきた内容をふり返り、それらを引き継ぐ研究課題として「他者」というテーマを位置づけた経緯について記す。

（1）集団研究会

プロジェクトの主査である河合は東アフリカ牧畜民を対象とした人類学的研究を進めてきた。東アフリカ牧畜民は隣接集団間で家畜の略奪の応酬をくりかえすことで知られている。だが、ある民族集団が隣接する個々の集団は「敵」と「身方」といったようにスタティックにわけられるものではなく、敵／非敵の関係は頻繁にかわりうる。こうした錯綜した集団間関係を理解するためには、「集団」とはそもそも何であるのかという本源的な問いをたてる必要があった。そしてこうした問いに人類学的に答えてゆくためには「進化史的な基盤」といった前提に則り、霊長類学、生態人類学、社会文化人類学といった分野の共同研究が有効であると考えられた。集団研究会には上記3分野に加え社会哲学の専門家の参加を仰いだ。

ここでわれわれがまず注目したのは、ヒトやヒト以外の霊長類が「集まる」というきわめて単純な事実であり、目にみえる「集団」なる現象の具体性に賭けるという姿勢が貫かれた。それは、抽象的な「社会」なるものに還元することなく「共同性」や「共在性」を語る姿勢でもあった。

集団研究会の成果をふたっだけ記す。ひとつめは「非構造概念」の重要性である。ここでとりあげられた集団現象の多くはその場その場における活動中心、行為中心的な非構造の集まりであった。それは「構造化ないし制度化された society に対して、社会的絆に基づく social であって、この socialこそが集団現象のより根源的なものと位置づけることができる。非構造の集ま

りは、生活時間に占める割合も決して少なくない、もっと正当に評価されるべき集まりである。サル、ヒトともに、集団の現実の姿とは、そこに何らかの非構造を含んでいることを積極的に考える必要がある。

ふたつめは「ヒトの獲得した表象能力と想像力」である。ヒトは進化のどこかの段階で、目の前にいない不可視の相手をも「仲間」として認識する能力を獲得したということ、すなわち「いま・ここ」を越えた認識を可能にする言語表象能力を獲得したことに関わる議論である。たとえば出自集団とか民族や国家などの集団を考えればわかりやすいと思うが、ヒトの場合、集団の構成員たちは互いに顔見知りではないということがふつうにある。それは言語による「〇〇出自集団」とか「〇〇民族」とか「〇〇国民」といった言語表象が可能にする事態であり、ヒトに特有な集団のあり方である。このことは人間の集団が言語をはじめとする制度による束ねであることをよく示している。集団研究会に続く研究会が「制度」をテーマとしたのは自然な成り行きでもあった。

(2) 「集団」から「制度」へ

プロジェクトの第2期は「集団」から「制度」へと新しいテーマを設定したが、その際に最低限確信されていたのは「集団なる現象が現にあるのは、そこに他個体／他者との共存、共在のための何らかの原理が働いているから」にほかならない、ということであった。そうした原理が行動として顕わになるものこそが制度と呼べるものであり、ヒト以外の霊長類にも集団が認められる以上、かぎ括弧付きの「制度」、プレ制度、あるいは制度の萌芽といったものが、その行為・行動からみえてくるはずだと考えられた。

制度研が目指したのは、「制度とは何か」を問うのではなく、ヒトとヒト以外の霊長類が共通して持っていたり、いなかったりする制度の進化的“基盤”が何であるのかを明らかにすることであった。それは、いいかえれば、人類社会の制度を制度たらしめているのは、どのような生物学的（進化的／系統的）および社会的特性なのかといった問いでもある。こうした前提ののち、さまざまな社会現象が「制度」との異同や関係という側面から検討された。すなわち、「ルール」、「システム」、「歴史」、「生態」などのことである。また、「生態的／社会的条件によって自らの行動を変化させることは制度化の第一歩である」という主張も重要な視点である。さらに、ひとつの大きな仮説として、情動（感情）の問題がある。「制度の情動起源説」と名づけられたこの説は、ある個体の行動が同じ群れの他者によって「ぎょ」とされたり（ネガティブな驚き）、あるいは「おっ」とされたり（ポジティブな驚き）する、そうしたことが制度の生成の根底にある、あるいは契機になるというものである。非言語的な社会で他者の行為に対して好悪の判断をするものとして「情動」なるものを考えるのである。さらに、制度は他者との関係の正しいあり方という意味での倫理とも関係があると考えられる。また、複数の個体が同所的に共存・共在する以上、競合や葛藤、あるいはその具体的な顕れである敵対的な相互行為の起きる可能性を否定することはできないが、制度が、そうした敵対的な相互行為を回避する機能を持っていることも確かであろう。それは、制度の「相互作用の不確実性を減らす」機能のひとつとして捉えればよいものである。

制度について現時点でたどり着いたところを挙げると、(1) 制度の原初形態を考えると「超越的な存在—神でも法でもよいのだが、そうした外在的な第3項の存在」を想定しなくてもよいのではないか、また(2) パニッシュメントがあるかないかを制度生成の条件とする必要はないのではないか、そして(3) 同じ地平上に在る諸個体／諸個人の行動の潜在的 가능성을考えるだ

けで十分ではないか、といったことである。

(3) 「集団」、「制度」から「他者」へ

「制度」に続く第3期のテーマを「他者」としたのは、集団においても制度においてもある個体／個人の行為が「他者」の存在を(暗黙の)前提としていたことが明らかであったためであり、そうであるならば、今度はそれ自体を主題化してみよう、それは翻って集団や制度を再考することでもあり、それらをいわば「逆照射」することになると考えられたためである。ここでは、社会とは「他者との相互交渉の束である」とする立場から、ミクロな対面的相互行為、とりわけダイアディックな関係に着目するいわば実践論的アプローチをとることになる。「他者」なる存在は、個に対して、どのように現れ、対峙し、関係するのか、それが「社会」なるものの生成・維持にどのように関わっているのかといった問いに向かうことになる。これはさらに個的な他者をこえ、他集団といった集合的な現象をも射程に入れておきたいと考える。

「集団」、「制度」、とやってきて、そして「他者」が始まった。この3つのテーマは、必ずしも明瞭なメインストリームがもともとあってそのシナリオにそってテーマを決め、議論してきたわけではない。だが、その底流に流れているのは、「共存」とか「共在」とわれわれが言ってきたものだと思う。メンバーのひとりはこの3つのテーマを、「われわれ」すなわち「we」意識の明確化の追求ということにつながるといふ。それはヒトとヒト以外の霊長類における社会的な側面をより重視しているものといえ、人類という種のきわだった特異性がその高度な社会性にあるということからすれば、あたりまえのことかもしれない。

2-1 「他者」が立ち現れるとき—霊長類の社会から(早木仁成)

野外で霊長類社会を調査する研究者にとって、対象とする霊長類そのものが「他者性」を帯びた存在なのだが、ここではそのような視点は横において、霊長類社会の中で対象とする霊長類個体にとっての「他者」が立ち現れるのはどのようなときかということを考えてみたい。

社会の中の個に注目すれば、誕生という場面は「他者」が立ち現れるべき最初の場面であろう。生まれ出た赤ん坊にとって、誕生は母親の胎内から分離されて、突然世界に投げ出されたようなものであり、自他の知覚/認知は形成すべき課題であると思われる。そういう意味では、「他者」は「自己」とともに成長の中で生成される。一方、母親にとって赤ん坊は分離された自分的一部分のようなものであるが、自分ではコントロールできない他者としての赤ん坊がそこに出現する。隔離飼育されたアカゲザルの研究などでは、出産直後に母親が赤ん坊を拒否し、攻撃したり異物として扱ったりすることが知られている。野猿公苑のニホンザル群の研究では、若い母親は赤ん坊の扱いが下手で、初産の赤ん坊の死亡率が経産の赤ん坊に比べてかなり高いことが知られている。野生チンパンジーでは、しばしば仲間から離れて孤独に出産するようであるが、出産後に赤ん坊を抱いて集団の中に現れ、他の仲間たちに赤ん坊を見せるような場面がよく観察されている。入れ替わり赤ん坊を覗きに来る集団の仲間たちにとって、赤ん坊は新しい成員としての他者であるにちがいない。チンパンジーでは、そのような赤ん坊をめぐる時折生じる子殺しという現象にも、「他者」という問題がかかわっているように思われる。

さて、成長のプロセスの中で自己/他者が生成されるとするなら、それはどのようなプロセスなのだろうか。リード(2000)によれば、ヒトの場合、生後3ヵ月ごろまでに乳児は自己のエージェンシーと他者のエージェンシーを理解し始め、外的事象(とくに、動物的事象)についての

予期を形成するようになり、自己のエージェンシーのコントロールを学習し始める。また、物のアフォーダンスを選択的に探索し、ある物に固有の特性があることへの予期を身につけ、その予期を自分の運動を通して確認する。そして、大人のジェスチャーと発声のリズミカルな構造を手がかりに、(相手の行動を予期することで、) 二項的な相互行為が創発するという。「規則」という視点で見ると、物に対する予期は「規則性」の学習であるのに対して、「他者」に対する予期はコンティンジェンシー(不確実性をともなった随伴関係)の学習であるといえるかもしれない。養育者との二者間でのかかわりを繰り返すことで、習慣的な対処を確立して、なじみの相互行為が形成されるのである。養育者以外のなじみのない者とは、予期を修正しつつ、徐々になじんでいくのだろう。

ヒトは生後9ヵ月ごろから、一つの物または事象に養育者とともに焦点化する能力を獲得し、環境のアフォーダンスを他者と共有する三項的相互行為(リード、2000)または共同注意フレーム(トマセロ、2008)を発達させる。このような能力が、他者の意図理解や言葉の獲得に重要な役割を果たすと考えられている。また、繰り返し実践される三項的な相互行為が共通の間主観的な場をつくり出すのだとすれば、それは他者への信頼や他者との共感を生み出す場ともなるだろう。

ヒト以外の霊長類では、このような三項的相互行為がヒトと同様に乳幼児期に発達するという報告はないが、霊長類の社会行動全体を眺めてみると、複数の個体がある一つの事象に焦点を合わせることはしばしば観察される。たとえば、移動を始めるときにはしばしば有力な個体の動向が注目されるし、警戒音が発せられた時には多くの者が警戒すべき対象に注目する。ある個体に対する共同攻撃も三項的である。チンパンジーにみられる集団狩猟や特定個体に対する集団リンチ事件なども三項的といえる。これらの事例では、たしかに三項的な枠組みが成立しているが、ヒトの三項的相互行為にみられるように対象(第三項)への注意を保持しながらそれを媒介項として二者間相互行為を展開しているとはいえない。むしろ多くの場合同一対象に対する行為が同時的に生じたものという理解が可能である。

ヒト乳児の三項的相互行為に類似しているのは、チンパンジーにみられる「のぞき込み」行動かもしれない。若いチンパンジーはしばしば何かをしている(たとえば、何かを食べるための作業をしている)大人の手元をすぐそばまで接近して熱心に長い間見つめる。見つめられる側は特に取り立てて見つめる者に対する反応を示すわけではないのだが、追い払ったりはしないという消極的な意味で二頭の間相互行為が成立しているとみなすことができる。

霊長類の社会は多様であるが、ニホンザルのような母系社会では、母娘のつながりを通じた血縁関係が群れ内の個体間関係に大きな影響を及ぼしていることは間違いない。群れ内の一個体に着目して周囲の他個体を眺めてみると、母親や自分の息子娘を含む血縁でつながった者たちとそれ以外の群れ内の者たちとの間には、明らかに付き合い方の相違がある。前者を身内、後者を顔見知りと呼んでおこう。これらの群れ内個体のほかに、時折群れの外から見知らぬ者があらわれる。

さて、血縁者をそうでない者よりも優遇することをネポチズムというが、ネポチズムには血縁選択による進化といった生物学的背景がある。ただし、動物が自分の血縁者と非血縁者をカテゴリとして認知しているとは考えにくい。母親が母乳で子を育てる哺乳類では、子どもの時からの近接や接触などのなじみの度合いを指標にして行動することで(長谷川・長谷川、2000)、結果的にネポチズムが生じていると考えられる。そうであるなら、たとえばニホンザル個体にとって、身内と顔見知りの違いはカテゴリカルな質的相違というよりもなじみの程度による量的相違

と考えられる。身内と顔見知りというカテゴリーをつくり出すのは観察する研究者の側であって、ニホンザル個体ではない。

一方、顔見知りと見知らぬ者との相違はニホンザルにとってさえ程度の差であるとはいえないだろう。知っているか知らないか、多少ともなじみがあるかないかという不連続な差がそこにはある。見知らぬ者との出会いにみられる強い警戒と敵対性が、その相違を物語っている。しかし、見知らぬ者はただ排除されるわけではない。たとえば、交尾期に現れる立派な体躯をしたハナレ雄は、群れ内の雌にとってはしばしばきわめて魅力的な存在のようである。そのようなハナレ雄は群れ内の多くの個体から攻撃を受けながらも、隠れて何頭かのメスと交尾をすることに成功する。ハナレ雄にとっては、雌との性関係を手がかりの一つとして、群れ内の個体と知り合いなじむことが移籍を成功させることにもつながる。

群れ内の身内や顔見知りは、これまでのさまざまな相互行為を通して、程度の差はあれ、なじみの関係を形成している仲間である。お互いの行為はある程度予測可能であり、そのため、共にいることに対してある程度の信頼感や安心感があるだろう。群れの外からやって来るなじみのない見知らぬ者に対しては、そのような安心感はない。集団間の出会いは通常敵対的であり、群れ内の個体からみれば、群れ外の者は仲間ではない者（すなわち敵？）である。しかし、群れ外のたとえばハナレ雄からみて群れ内の者は必ずしも敵対すべき相手ではない。見知らぬ者間の関係はかならずしも対称的ではないようである。

霊長類の社会は、原則として顔見知りの者たちで構成される集団である。集団内の個体は見知らぬ者に対して排他的であるが、ときに見知らぬ者を受け入れる。移入者は集団内の個体とさまざまな相互行為を繰り返しながら、しだいに集団の一員となる。つまり、見知らぬ者が見知らぬ者として集団に留まり共存するわけではない。人間が作り上げたさまざまな制度は、このような見知らぬ者との共存可能性を前提にして発展してきたと思われる。「他者」を考えることは、社会の中で共に生きることを考えることであろう。それは、これまでの研究会で議論されてきた「集団」や「制度」の問題を逆照射するように思われる。

エドワード・S・リード（2000）「アフォーダンスの心理学 ー生態心理学への道」、新曜社。

マイケル・トマセロ（2008）「ことばをつくる」、慶應義塾大学出版。

長谷川寿一・長谷川真理子（2000）「進化と人間行動」、東京大学出版会。

2-2 生態人類学における「他者」をめぐって（曾我亨）

本発表では、最初に、生態人類学における他者の特徴を際立たせるために、哲学と文化人類学の分野における他者について概観した。哲学においては、自分以外のすべての人間を他者としてきたことを述べ、他者についての哲学的議論（たとえば間主観性をめぐる議論）が、進化を考える霊長類学者の一部に強い影響を与えてきたことを指摘した。つぎに文化人類学は異民族を他者としてきたことを述べ、他者についての人類的議論が、表象の政治性に集中してきたことを指摘した。その上で、表象することの政治性を批判することは、文化人類学者にとっては重要な課題であるかもしれないが、ヒトと霊長類との進化史的基盤を検討するには相応しくないと主張した。

これらの準備を経て、生態人類学が取り上げる他者について3つ例をあげ、他者の扱われ方を検討した。1番目は、牧畜社会における他者である。牧畜社会において、他者は主に「敵＝異民族」として描かれてきた。けれどもこの他者は流動的な関係性を秘めており、友人となったり敵となったり、異民族であると同時に親族であったり、外なる自己として表象されたりすることを指摘した。

二番目は狩猟採集社会における他者である。集団研の成果（曾我2009）で論じたように、「われわれ」意識の輪郭が、民族の輪郭と常に一致するわけではない。民族というカテゴリーとは別に、対面的なインタラクションの集積としてあらわれる「われわれ」が存在する。本発表では、ピグミー研究を題材に、誰が「われわれ」となり誰が他者となるかは、分かち合いや共住などの日常的なインタラクションの集積によって決まることを指摘した。

三番目は近代化の中で登場する「他者＝友人」について論じ、それがいわゆる伝統文化のなかでおこなわれているインタラクションとは異なるインタラクションによって生成されていることを指摘した。

これら3つの先行研究とは別のタイプの他者研究の可能性として、他者の曖昧さ、理解しがたさを前提にした上で、ときに人間は自分の問題をすべて他者にゆだねてしまうという現象について、レヴィナスの〈顔〉をめぐる議論を参照しながら考察した。人間は苦境にあるとき、つまり他者に自己を投げだすとき、人は〈顔〉として他者の倫理的感情を呼び起こす。その時、人は他者に自己を投げ出す。倫理的にふるまう他者にこそ、自己を投げだし、委ねることが可能になるのだと論じた。ちなみに発表者の関心は、この「自己を投入する存在としての他者」の探求にある。

最後に、これらの生態人類学的な他者像を踏まえた後、霊長類学とどのように接続し、進化史的基盤を考えることができるかを、各先行研究課題に対応させて提案した。

曾我亨 2009 「感知される〈まとまり〉—可視的な〈集団〉と不可視の〈範疇〉の間」 河合香吏編『集団—人類社会の進化』京都大学学術出版会, pp. 203-222.

2-3 「他者の理解」から「他者との制作」へ：社会・文化人類学における「他者」（大村敬一）

この発表では、1980年代から現在にいたるまでの文化人類学において他者がいかに扱われてきたかについて検討するとともに、共同研究会「人類社会の進化史的基盤」シリーズの第3シーズンでの主題である「他者」について文化人類学の立場からいかなるアプローチが可能であるかについて考察した。

19世紀末から20世紀初頭に、「人類はどこから来たのか、いかなる存在であって、いかなる存在になりうるのか」という問いに人類の諸文化の調査を通してアプローチする体系的な実証科学として誕生して以来、文化人類学は自文化とは異なる文化的な他者について実証的に調査・研究することを方法論的な軸としてきた。しかし、1980年代に、そうした近代人類学の方法論的

な軸であった文化的な他者理解の在り方に、「本質主義」と呼ばれる植民地主義的な眼差し（オリエンタリズム）が組み込まれていることがポスト・モダン人類学とポスト・コロニアル人類学によって明らかにされ、近代人類学は自らの方法論を見直す必要性に迫られることになった。民族誌のかたちで文化的な他者を描き出す近代人類学の理論的前提には、差異に溢れているが故に画一的な基準では捉えがたい人々を均一で画一的な近代的主体に押し込めながら支配して管理するための同一性の政治があることが見出され、そうした理論的前提を再考することが求められるようになったのである。

こうした自己反省を経た文化人類学では、1990年代から今日にいたるまで、同一性の政治とは異なる前提に基づいた他者観や自他関係の可能性が模索されてきた。その際に重要だったのは、単に自省して自らの理論的前提を見直すのみならず、これまで文化人類学によって民族誌のかたちで描き出されてきた人々の他者観や自他関係の在り方を同一性の政治の前提から距離をとって再考し、そこに、近代的な支配と管理のシステムである同一性の政治とは異なる前提に基づいた他者観や自他関係が息づいていることが再発見されるようになってきたことである。

この発表では、こうした動向に焦点を絞って1990年以後の文化人類学での他者観を検討した。こうした動向には、次のようないくつかの方向性がある。

(1) 単一の基準に基づいて差異を消滅させながら他者を自らのうちに取り込む近代の同一性の政治での提喩的な想像力（たとえば、オリエンタリズム）とは対照的に、多様な基準の差異を残したまま他者と繋がってゆこうとする野生の思考の換喩的／隠喩的想像力を明らかにしようとする動向。

(2) 自己の外部の他者を自己に同一化することで自己のシステムを維持して拡張する近代の他者化＝主体化とは異なり、自己との異質性を維持したまま他者を迎え入れる場所を自己の内部に確保することで、他者性を保持したままの他者と折り合いをつけつつ、その他者と共在してゆく他者化＝主体化の方法があることを明らかにしようとする動向。こうした他者化＝主体化の方法をとる社会では、そうした他者のための場所が社会それ自体を支える要になっており、自己との他者の異質性が自己を維持するために不可欠であるため、そうした社会は非拡張的なシステムとして閉じつつも（他者を同一化して取り込むのではなく）、他者との交通に開かれた（他者との異質性を保持したまま他者とコミュニケーションする）システムを形成する。

(3) たった一つの「自然」という単一の基準のうえに多様な「文化」が構築されるわけではなく、「人間と非人間（モノ）の共同体」が相対的であるとする自然＝社会・文化相対主義の立場にたって、多様な「人間と非人間（モノ）の共同体」がそれぞれの多様な基準を維持したまま相互に繋がり合って交流する可能性を模索する「存在論的転換」の動向。

これら一連の動向に共通しているのは、近代の同一性の政治とは異なる前提に基づく他者観や自他関係の在り方が人類の間に存在しており、その多様な他者観や自他関係の在り方が人類の社会の在り方に多様性をもたらしているという認識である。この意味で、現在、文化人類学は自省の時代を乗り越えて、人類の多様性を検討することを通して人類とは何かを探るという本来の任務に立ち返りつつあると言える。また、こうした文化人類学の現在の動向は、他者を自己の基準で理解することによって他者を自己に同一化してしまうのではなく、自己との他者の異質性をそのまま維持しながら他者と交通しつつ、多様な他者が共在する世界を他者と共同で制作してゆこうとする方向に舵を切ったと言えるかもしれない。

こうした動向にある文化人類学は、本共同研究会「人類社会の進化史的基盤」シリーズの第3シーズンでの主題である「他者」の問題について、人類の諸社会における他者観や自他関係の多様性を示し、その多様性を支えている人類社会の進化史的基盤を考察することで貢献することができるだろう。また、人類の他者観や自他関係の多様性を通してその多様性の進化史的な基盤を追求することは、本共同研究会のシリーズ全体の主題、すなわち、人類における集団や制度の多様性を通して人類社会の進化史的基盤を考察することに通じることになる。オリエンタリズムの他者観が同一性の政治という集団や制度の生成原理と表裏一体であることからわかるように、他者観や自他関係は集団や制度の在り方と密接に結びついているからである。